研究ノート

授業「造形表現」に関する学生の意識調査

大　塚　習　平

Attitude survey about the class of Education through Art

Shuhei Otsuka

要旨：

幼稚園教諭・保育士養成校における授業「造形表現」では、教える立場に立った内容を学習し、子ども達にとって表現しやすい環境を整える事や、遊びを通した学びの実践を目的としている。学習者は、高等学校まで学んできた内容において、立ち位置が異なる取り組みが要求される。そこで、授業「造形」の目的について学習者が無理なく理解できるよう「造形に関するアンケート調査」を実施し、その結果について共有しながらコメントを加える事で「表現を支える人になる」という自覚を促してきた。本稿では、3年間のアンケート結果を振り返り、学年や養成校による学生の意識について比較し、考察を加えた。

キーワード：

造形表現　幼児教育　図画工作　美術教育

Ⅰ．はじめに

幼稚園教諭及び保育士養成校に入学してくる学生は、小学校「図画工作」や中学・高校「美術」における「表現」及び「鑑賞」の授業を通して、自己の持つイメージを表現したり、対象を観察して描いたり、絵画や彫刻作品のコンセプトについての調べ学習を積み重ねたりしてきている。

学習指導要領小学校「図画工作」[1]では「表現したり鑑賞したりする態度を育て」る事を主軸としている。そして、「つくりだす喜びを味わう」為の具体的な方策として「材料などの特徴をとらえ」ながら「想像力を働かせて発想」したり「主題の表し方を構想」したりし、「様々な表し方を工夫」する事を目的としている。また鑑賞については「親しみのある作品」を通して「よさや美しさ」に気付き「大切にする」気持ちを養うとしている。

中学校「美術」[2]では「主体的に美術の活動に取り組」む事を通して、「美術を愛好する」気持ちを大切にしながら「心豊かな生活」を生み出すことを主軸としている。そして「独創的・総合的な見方や考え方」を身につけながら「自分の表現方法」を見出し、創造力を伸ばしていく。鑑賞については「自然の造形」「美術作品」「文化遺産」などについて着目し「心豊かに生きること」と美術の「よさや美しさ」を味わう力を養うとしている。

高等学校における「美術」[3]は、「芸術」分野（他に「音楽」「書道」「工芸」がある）に含まれており、教科目標として「造形的な視点」を持つ事、表したいことに応じた表現方法を「創意工夫し、創造的に表すことができる」事とし

ている。鑑賞については、「造形的なよさや美しさ」「表現の意図と創意工夫」「美術の働き」を基に、「主題」「発想」「構想」について考えながら「美術や美術文化」について深く理解し、愛着を持つこととしている。そして、これまでの学習の集大成として、「主体的に美術の幅広い創造活動に取り組」む事、「生涯にわたり美術を愛好する心情を育む」事を通して、「心豊かな生活や社会を創造していく態度を養う」としている。つまり、「図画工作」「美術」という教科を通して、一人一人が表現者となり同時に鑑賞者ともなり、それが心豊かに生きる事に帰結するとしている。

Ⅱ．アンケート調査の目的と結果

幼稚園教諭・保育士養成校における授業「造形表現」では、教える立場に立った内容を学習し、子ども達にとって表現しやすい環境を整える事や、遊びを通した学びの実践を目的としている。しかし学習者は、高等学校まで学習指導要領を通して、自身の表現能力及び鑑賞能力を育てる事を目的としてきた。よって、養成校での授業開始の瞬間から、立ち位置の異なる取り組みが要求される事となる。

本学では、学習者が授業「造形表現」の目的について正しく理解できるよう、下記項目によるアンケート調査を実施している。結果については、学習者と共有しながらコメントを加える事で「表現を支える人になる」自覚を促してきた。また、アンケート結果を研究に使用する事については、学生の同意を得ている。

「造形に関するアンケート調査」

1. 調査期間 2017年4月12日～2019年7月6日
2. 調査対象「造形表現」受講生472名
3. 調査方法 授業初回に用紙を配布し、記入後回収
4. 回収状況 配布数472 回答数472（回収率100％）
5. 質問項目

①「あなたは子どもの描く絵について、上手だと思いますか？」
②「絵を描いたり、ものを作ったりする事は、子どもにとって良い事だと思いますか？」
③「子どもが絵を描いたり、ものを作ったりする事と、子どもの成長とは何か関係があると思いますか？」
④「あなた自身、絵を描く事は好きですか？」
⑤「あなた自身、ものを作る事が好きですか？」
⑥「あなたは絵を描いたり、ものを作ったりする事に苦手意識を感じていますか？」

5.① 「あなたは子どもの描く絵について、上手だと思いますか」

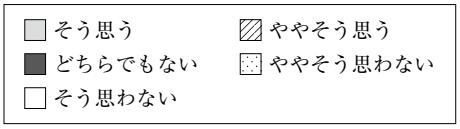
「あなたは子どもの描く絵について上手な絵だと思いますか」という質問に対し、「そう思う」と回答した学生は、2019年度1年生が1番多かった（図5）。次いで2018年度生（図4）、2017年度生（図2）となった。この数値は短期大学生（図1）とほぼ一致している。

次に「そう思う」と「ややそう思う」をまとめ、「肯定的に捉えている」として見てみると、2019年度生が一番多く（図5）、次いで2018年度生（図4）、2017年度生（図2）の順となっている。2017年度短期大学生は一番低い（図1）結果となった。2018年度生では3年生にも同じアンケートを行ったが、肯定的に見ている学生は高い数値（図4）を示した。「そう思わない」「ややそう思わない」と回答した数値が高かったのは2018年度生（図3）であり、次いで2017年度短期大学生（図1）、2018年度3年生

(図 4)、そして 2019 年度生と 2017 年度生は同じ数値となった (図5、図2)。「どちらでもない」としたのは 2017 年度生と 2017 年度短期大大学生が多く (図 1、図 2)、次いで 2019 年度生 (図 5)、2018 年度生 (図 3)、そして 2018 年度 3 年生 (図 4) となった。

5.② 「絵を描いたり、ものを作ったりする事は、子どもにとって良い事だと思いますか」

「あなたは子どもが絵を描いたりものを作ったりすることは良いことだと思いますか」という質問に対し「そう思う」と回答したのは、2017 年度短期大学生が一番高く (図 6)、次いで 2018 年度 3 年生 (図 9)、2018 年度学生 (図



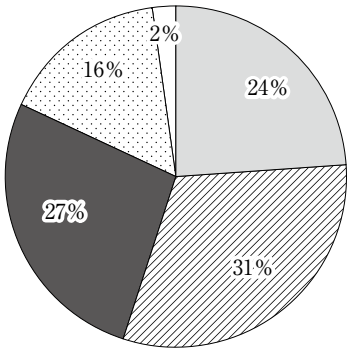


図 3 「2018 年 4 月　T 大学 1 年前期　103 名」

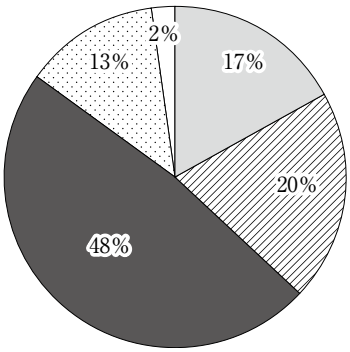


図 1 「2017 年 4 月　S 短期大学 1 年前期　132 名」

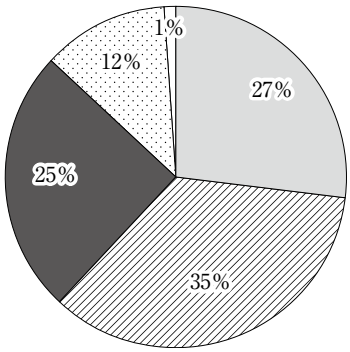


図 4 「2018 年 4 月　T 大学 3 年前期　30 名」

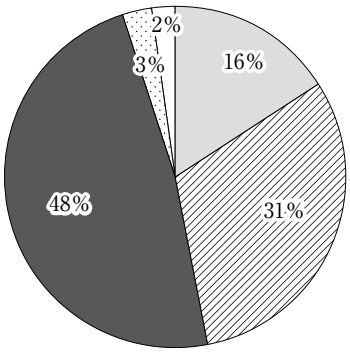


図 2 「2017 年 9 月　T 大学 1 年後期　96 名」

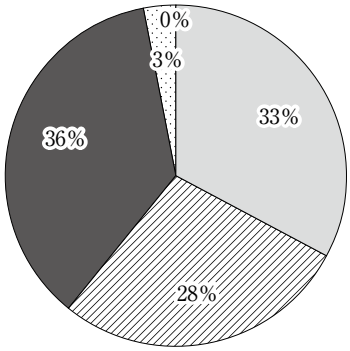
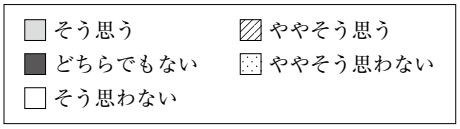


図 5 「2019 年 7 月　T 大学 1 年前期　105 名」

8)、2019 年度学生（図 10)、2017 年度生（図 7）となった。「そう思わない」「ややそう思わない」という回答はともに 0％で、「どちらともいえない」と回答したのは、2017 年度学生が一番高く（図 7)、次いで 2019 年度学生（図 10)、2018 年度学生（図 8)、2018 年度 3 年学生（図 9)、2017 年度短期大学生（図 6）の順となった。

5.③ 「子どもが絵を描いたり、ものを作ったりする事と、子どもの成長とは何か関係があると思いますか」

「あなたは子どもが絵を描いたりものを作ったりすることは成長と関係があると思いますか」という質問に対し「あると思う」と回答し



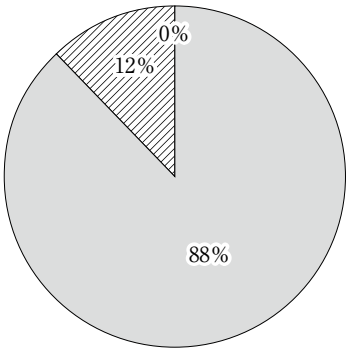


図 8 「2018 年 4 月　T 大学 1 年前期　103 名」

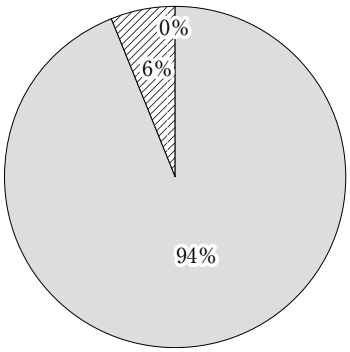


図 6 「2017 年 4 月　S 短期大学 1 年前期　132 名」

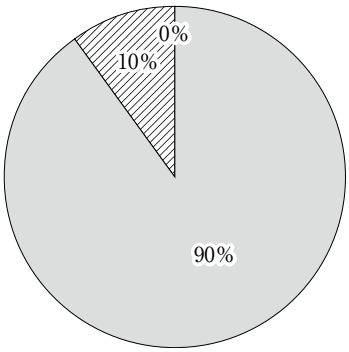


図 9 「2018 年 4 月　T 大学 3 年前期　30 名」

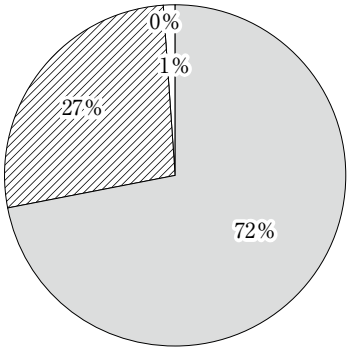


図 7 「2017 年 9 月　T 大学 1 年後期　96 名」

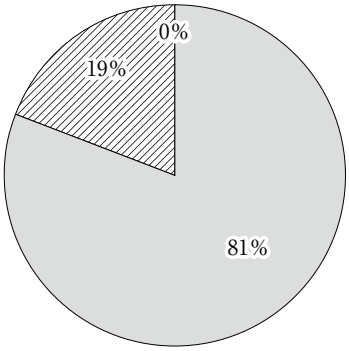
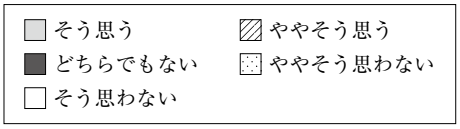


図 10 「2019 年 7 月　T 大学 1 年前期　105 名」

たのは、2018 年度学生が一番高く（図 13）、次いで2019年度学生（図15）、2018年度3年生（図14）、2017 年度短期大学生（図 11）、2017 年度学生（図 12）の順であった。「どちらでもない」としたのは、2017 年度学生が一番高く（図 11）、次いで 2017 年度短期大学生と 2018 年度 3 年生（図 14）で、2019 年度学生（図 15）、2018 年度学生（図 13）の順であった。「そう思わない」ややそう思わない」としたのは 2017 年度短期大学生と 2017 年度学生で同じ 6%（図 11、図 12）、次いで 2018 年度生（図 13）、2018 年度 3 年生（図 14）となり、2019 年度生は 0%（図 15）であった。



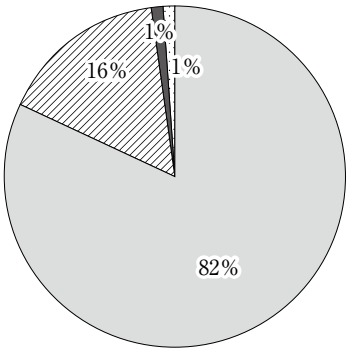


図 13 「2018 年 4 月　T 大学 1 年前期　103 名」

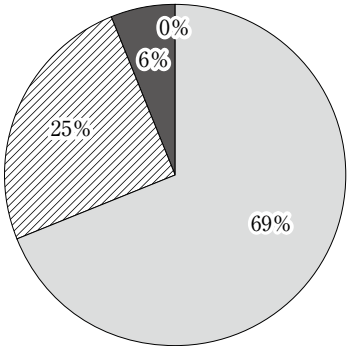


図 11 「2017 年 4 月　S 短期大学 1 年前期　132 名」

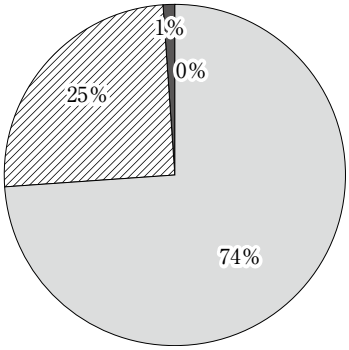


図 14 「2018 年 4 月　T 大学 3 年前期　30 名」

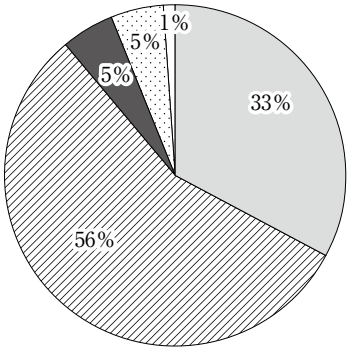


図 12 「2017 年 9 月　T 大学 1 年後期　96 名」

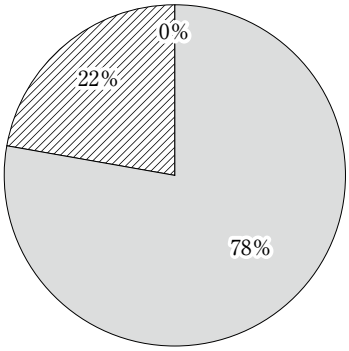
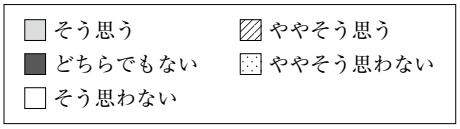


図 15 「2019 年 7 月　T 大学 1 年前期　105 名」

5.④ 「あなた自身、絵を描く事は好きですか？」

「あなた自身、絵を描くことは好きですか」という質問に対して「そう思う」「ややそう思う」と回答した2019年度学生が一番高く（図15）、次いで2018年度3年生（図14）、2017年度学生（図12）、2018年度学生（図13）の順となり、2017年度短期大学生（図11）は半数以下であった。



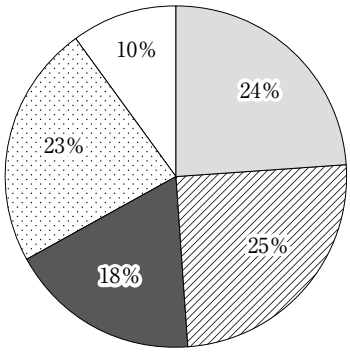


図18 「2018年4月　T大学1年前期　103名」

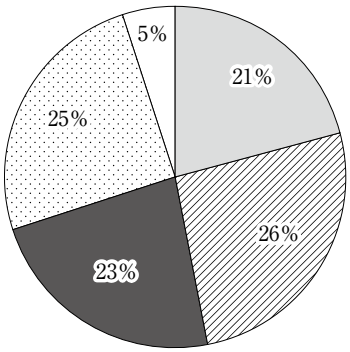


図16 「2017年4月　S短期大学1年前期　132名」

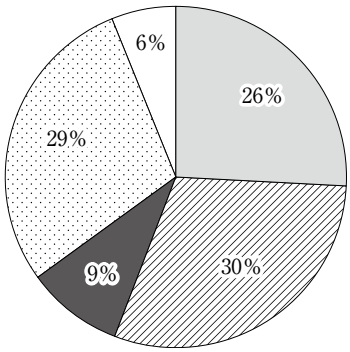


図19 「2018年4月　T大学3年前期　30名」

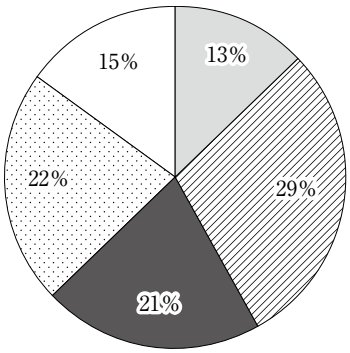


図17 「2017年9月　T大学1年後期　96名」

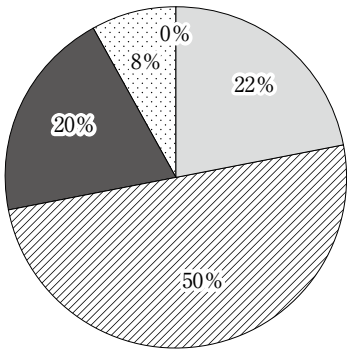
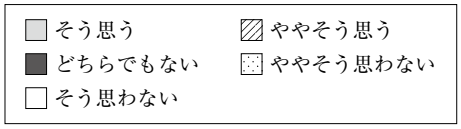


図20 「2019年7月　T大1年前期　105名」

5.⑤ 「あなた自身、ものを作る事が好きですか？」

「あなた自身、ものを作ることは好きですか」という質問に対して、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生は、2019 年度学生が一番多かった（図 25）。次いで 2018 年度 3 年生（図 24）と同じく 2018 年度学生（図 23）、2017 年度短期大学生（図 21）、そして 2017 年度学生（図 22）となった。ただし、2019 年度学生においては、「ややそう思わない」「そう思わない」という否定的な回答者が全体の一割程度いた。



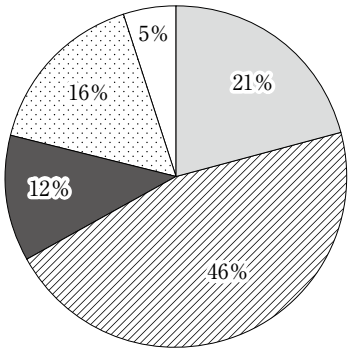


図 23 「2018 年 4 月　T 大学 1 年前期　103 名」

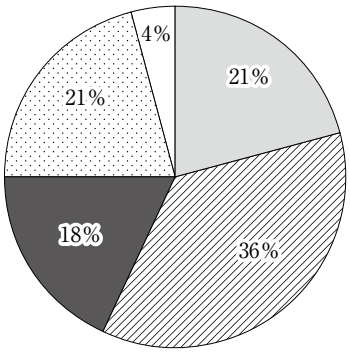


図 21 「2017 年 4 月　S 短期大学 1 年前期　132 名」

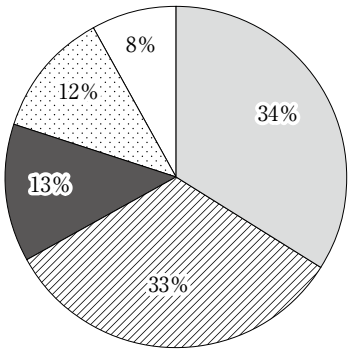


図 24 「2018 年 4 月　T 大学前期 3 年　30 名」

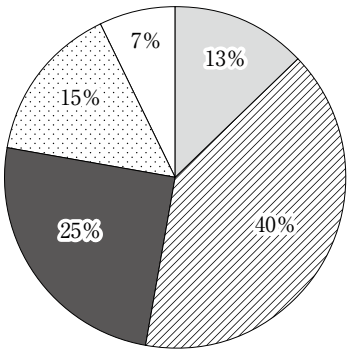


図 22 「2017 年 9 月　T 大学 1 年後期　96 名」

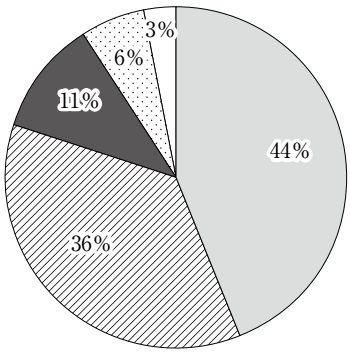
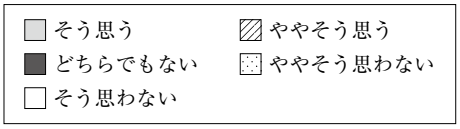


図 25 「2019 年 7 月　T 大学 1 年前期　105 名」

5.⑥ 「あなたは絵を描いたり、ものを作ったりする事に苦手意識を感じていますか？」

「あなたは絵を描いたり、ものを作ったりすることに苦手意識を感じていますか」という質問に対し、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生は、2017年度短期大学生（図26）が一番多く、次いで2019年度学生（図30）、2017年度生（図27）と2018年度学生（図28）、そして2018年度3年生（図29）という結果になった。またこの結果に伴い、養成校において「絵を描いたり、ものを作ったりする事に苦手意識」を感じていない学生は、短期大学、4年制大学問わず、毎年、各学年で20％～30％いる（図26、図27、図28、図29、図30）事も明らかとなった。



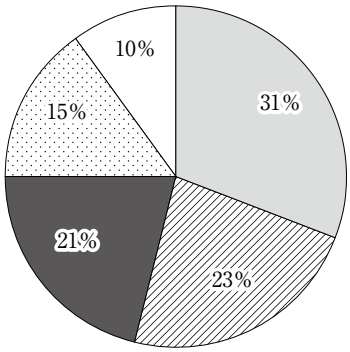


図28 「2018年4月　T大学1年前期　103名」

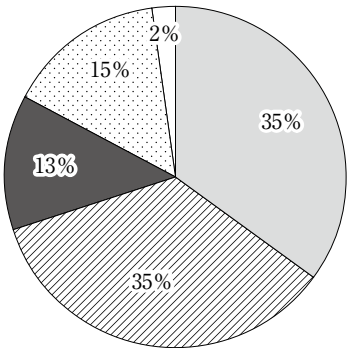


図26 「2017年4月　S短期大学1年前期　132名」

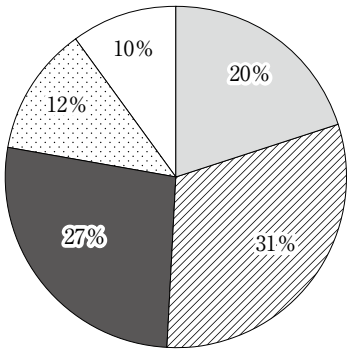


図29 「2018年4月　T大学3年前期　30名」

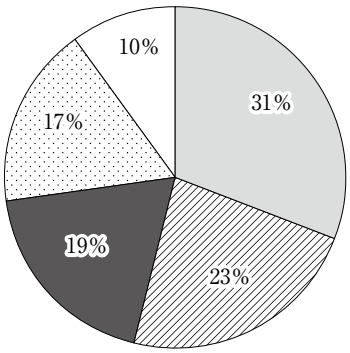


図27 「2017年9月　T大学1年後期　96名」

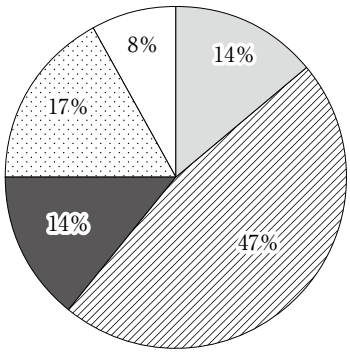


図30 「2019年7月　T大学1年前期　105名」

Ⅲ．考察

今回の調査においては、それぞれの養成校の比較、短期大学生と4年制大学生との比較、前期授業開始時と後期授業開始時との比較、3年生と1年生との比較について、それぞれ振り返る機会に恵まれた。そして、調査結果によれば、これらの比較項目において、特筆すべき違いは見受けられなかった。しかし、4年生後期のタイミングで調査を行った場合、意識の違いについて異なる結果を見出すことができると予想される。

2019年度は「絵を描くのが好きだ」という学生の割合が72％（図20)、「ものを作るのが好きだ」という学生が80％（図25）と、例年に比べて高かった。しかし、これと並行して「苦手意識」も63％と高かった（図30)。そうした学生は、何らかの理由により、「好き」と感じながら「苦手意識」もあるとしている。なぜ苦手としているのか調べてみたところ、その理由は以下の通りとなった。

「上手に描けないから」(35)
「イメージした通り描けないから」(15)
「時間がかかってしまい、遅れてしまう」(4)
「高校までの成績が悪かったから」(4)
「アイデアが浮かばず、考えるのが辛い」(4)
「見たとおり正確に描く事ができない」(3)
「組み立てるのが不得意だから」
「いつも人（妹）と比較されて嫌だったから」
「飽きてしまい、長続きしないから」

このように、造形表現について「苦手意識」を持つ理由として特に多いのは「(絵を）上手に描けないから」という事が分かる。「あなたは子どもの描く絵について上手だと思いますか」という質問に対しては、ほとんどの学生が「上手、下手は関係ない」と回答している。つまり、子どもの絵に関しては、肯定的に捉えようとしていても、自分の絵に関しては、「上手さ」に拘ってしまい、自己肯定感が低くなるという矛盾を抱えているようである。その原因について考えてみると、「青年期」にある学生が「写実期」を経験し、対象を見たままそっくりに描写する事への憧れを抱きつつも、それを達成する機会に恵まれないままでいるからではないかと推察される。加えて、「高校までの成績が悪かったから」という回答から、美術教育における「評価」のあり方が、写実的なものに偏っていることも、こうした矛盾を生み出す要因となっている可能性がある。対象を写実的に描くためには、ある程度決まった法則に従わなければならない。対象を観察する眼を養い、それを手に連動させ、立体的に見せる細かな技術を積み重ねていくのである。これに対し、子どもの絵の描き方は、捉えた対象を表現するためにどうすれば良いか、直感的に法則を作り出していると言える。こうした、真逆とも言えるそれぞれの「表現」活動について理解する事が、自己肯定感に繋がり、本当の意味で「子どもの創作活動を育む人」になると考えられる。

また、2019年度1年生と、2018年度3年生を比較してみると、どちらも子どもの描く絵に対して肯定的であり、結果がよく似たものとなっている（図3、図5)。3年生の場合、実習を通して子ども達の状況を把握しているので、肯定的な結果となったのは納得できる。しかし、1年生の場合、まだ知識も経験も不十分である為、直感的に回答していると考えられる。ここが異なる点であるが、2019年度1年生は前述の通り、例年よりも造形表現全般に対し、肯定的な学生が多い。このことから、子どもの絵について考える時、自分自身の幼い頃を振り返り、それを重ね合わせる事で、結果的に良い

イメージを持つ事に繋がったのではないかと推察される。

過去に１度、アンケート調査を行わずに授業を開始した年があるが、その年度は学生から授業の目的について質問されることが多かった。それは、これから「成長を育む立場になる」というレディネスができていなかった為と思われる。しかし、アンケート調査を実施した年度においては、授業目的に関する質問を受けることはなかった。学習者がアンケートの質問に答える事を通して、自分自身の経験を振り返り、整理しながら授業目的について把握できたからと推察される。

Ⅳ．おわりに

子どもの発達段階と「表現」の関係について学んでいくと、学生もまた発達の途上にあり、磨けば磨くほどその人の個性や表現力は深みを増していく事に気付かされます。学生一人一人の発達段階に相応しい能力を最大限引き発揮する事と、人を育む人材としての知識や技能を身につける事を同時に満たすことは、困難でありながら同時に楽しみでもあります。

アンケートにもあったように、描き方が稚拙な事を悩む学生がおりますが、例え稚拙な描き方の絵であったとしても、心惹かれる作品は世の中に数多く存在します。アフリカやメキシコ、アボリジニ等に代表される原住民アートが良い例だと思います。それが子どもの絵であっても、何ら不思議な事ではありません。授業では、それぞれの発達段階による子どもの描く絵をなぞる事に取り組んでいますが、そこでは「上手・下手」という定規では測り切れない、規格外とも言える「子どもの描く絵」の良さに、気付いていただけたと思います。

註

1)「(1)創造的に表現したり鑑賞したりする態度を育てるとともに、つくりだす喜びを味わうようにする。(2)材料などの特徴をとらえ、想像力を働かせて発想し、主題の表し方を構想するとともに、様々な表し方を工夫し、造形的な能力を高めるようにする。(3)親しみのある作品などから、よさや美しさを感じ取るとともに、それらを大切にする」「小学校学習指導要領（平成 29 年告知）解説　図画工作編」平成 29 年　文部科学省　p.9

2)「(1)主体的に美術の活動に取り組み美術を愛好する心情を深め、心豊かな生活を創造していく意欲と態度を高める。(2)対象を深く見つめ感じ取る力や想像力を一層高め、独創的・総合的な見方や考え方を培い、豊かに発想し構想する能力や自分の表現方法を創意工夫し、創造的に表現する能力を伸ばす。(3)自然の造形、美術作品や文化遺産などについての理解や見方を深め、心豊かに生きることと美術とのかかわりに関心をもち、よさや美しさなどを味わう鑑賞の能力を高める」「中学校学習指導要領（平成 29 年告知）解説　美術編」平成 29 年　文部科学省　p.9

3)「(1)対象や事象を捉える造形的な視点について理解を深めるとともに、意図に応じて表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにする。(2)造形的なよさや美しさ、表現の意図と創意工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生成し創造的に発想し構想を練ったり、価値意識をもって美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。(3)主体的に美術の幅広い創造活動に取り組み、生涯にわたり美術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、美術文化に親しみ、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養う」「高等学校学習指導要領（平成 30 年告知）解説　芸術（音楽　美術　工芸　書道）編　音楽編　美術編」平成 30 年　文部科学省　p.101